東京学芸大学リポジトリ
Tokyo Gakugei University Repository

外国人児童生徒に関わる教育について：多民族国家オーストラリアから学ぶ

メタデータ	言語: Japanese
	出版者:
	公開日: 2022-06-30
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 長谷,瑛子
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/2309/00174215

外国人児童生徒に関わる教育について

―― 多民族国家オーストラリアから学ぶ ――

前シドニー日本人学校　教諭
埼玉県戸田市立戸田東中学校　教諭　長　谷　瑛　子

キーワード：外国人児童生徒への支援，国の言語政策，ESL 教育

1．はじめに

オーストラリアは，ヨーロッパ系，アジア系，先住民アボリジニ（混血含む）ほか，様々な民族で構成されている。現在も年間８～10万人の移民を受け入れ，国益・経済的観点から移民を人的資源・文化資本として捉えている。本レポートでは，このようなオーストラリアの外国人児童生徒の支援について考察し，紹介したい。

2．外国人児童生徒に関する施策概要の日豪の比較

外国人児童生徒の扱い方について，それぞれ，日本は文科省の「海外子女，帰国・外国人児童生徒教育等に関するホームページ」通称CLARINET（Children Living Abroad and Returnees InterNET）より，一方，オーストラリアは教育機会の平等を目的としたESLに関するガイドラインより概要をまとめた。

日　　本	NSW（ニュー・サウス・ウェールズ州）
外国人の子弟には就学義務はない。／受け入れ後は，授業料不徴収，教科書の無償給与など，日本人児童生徒と同様の扱い。／日本語指導や生活面・学習面での指導，特段の配慮／教員の配置／教員研修における情報交換／日本語指導者の養成，研修／「JSL」カリキュラムの開発／教材・資料の作成（就学ガイドブックなど）	学校教育・学校生活のみならず自立的な高等教育，就業に向けた教育をめざす。／ ESL 教師の通常配置，短期間配置／学校（ESL 教員，担任，ESL 監督者，校長）におけるESL 体制の責任の明記／学習者の３段階によるレベル分け／初等・高等教育の一貫したカリキュラム作成／ ESLを要する児童生徒の在籍数の把握，年間調査／ IECs，IEHSの設置，援助／ ESL 教員の研修，サポートの充実／通訳，翻訳のサービス／ ESL 教員の認定

NSW 州では，公立学校に向けたESLに関するガイドラインが示されている。これは，英語を母国語としない児童生徒の教育，訓練，雇用における将来を見据えたサポートを行うというものだ。具体的には，英語を母国語としない子どもたちのためのESL（English as a Second Language）クラスを設けている。来豪したばかりの生徒，または支援が必要と判断された生徒を対象とする。ESLの授業を受ける時間は，生徒の英語のレベルによって調整される。

3．シドニーに住む児童生徒たちのための教育機関の選択肢

海外での学校選びは，保護者や子どもたち本人にとってたいへん重要な問題である。また，子どもの年齢，性格，いつ（タイミング）どれくらい（期間），言語習得における適齢期や友だち関係等を含めて悩む保護者の方も少なくない。ここではシドニーの学校選択について，以下にそれぞれの教育機関の特徴をまとめた。

▼初等教育における多様な選択肢①

	日本人学校	現地校	
公　私	私立・文部科学省の支援有り	公立	私立
特　徴	・日本の教育課程に基づき，国内と同等（それ以上）の教育。 ・国内からの派遣教員	・希望の学校へ予約，面接等 ・人気校の場合は予約待ち（学区優先）	・プラスの補習授業 ・豊富な科目の選択肢 ・整った学校設備

費　用	入学金＄1000 年間＄8200 ＋副教材，行事費，制服など ＋申請料，学校債など	・永住者は基本的に無償＋年間＄50～＄250（行事費，副教材費，制服など） ・一時滞在者は別途必要	カソリック系： 年間＄700～＄6000 独立系：年間＄2500～＄13000 寄宿制：学費＋＄6000～＄8500
メリット	・国内と同等の小学校（中学校）の修了課程が取得でき，帰国後の学力を確保できる。	・現地の言語や文化に存分に浸ることができる。	
デメリット	・日本人社会のため，現地交流の機会はやや少ない。	・言語の壁やカルチャーショックの危惧がある。 ・帰国後の学習内容のリカバリーが必要。	

▼初等教育における多様な選択肢②

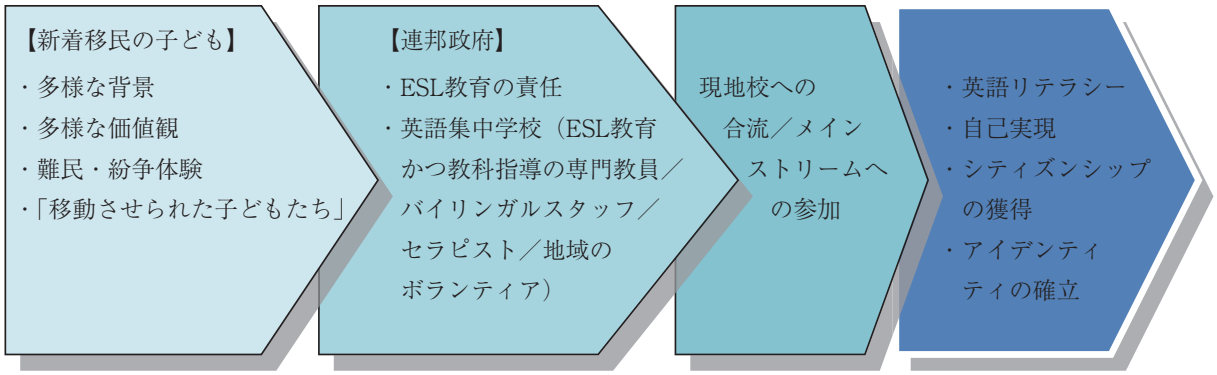
	IEC	日本語補習校
特　徴	現地の公立校の中の一部。HSに入るための準備期間。	・先生と日本語で会話できることが最低条件 ・週3時間，年間110時間程度の授業において，国数を中心に，日本文化などを含めた授業。
公　私	現地校に準じる	私立（ボランティ父母により設立開校）
費　用	・永住者は無償 ・留学生，一時滞在者はNSW州の場合，＄4500～5500の授業料と＄110	年間＄430
メリット	・学習者に応じて細やかなサポート。現地校へのスムーズな移行。	・教科書を用いて，日本で教員資格を取得した教員が学習指導書に沿って指導。
デメリット	・国内の学習内容から外れるため，帰国予定者はそのリカバーも必要。	・学習者の日本語レベルや動機，ニーズが多様。各自の明確な動機と保護者の支援が必要。

4．Intensive English Centre（以下「IEC」）について

(1) IECの概要

現在NSW州には14校のIECがある。IECとは国の支援と規定を受け，現地の公立校の中の一部に位置し，英語を第1言語としない外国人生徒を受け入れ，現地校への移行をスムーズに行うための特設クラスのことである。HSに入ってからのESLのサポートとは違い，HSに入る前の準備期間として，18人の生徒に対し1人の教師といった手厚い配置が国の規定によって決められている。これらのIECは以下のような特徴がある。

・永住権のある移民の子どもの場合，授業料は無料・短期滞在者の場合は有料
・教科学習を通じて英語を学ぶ方法論（content-based approach），教科特有の語彙表現
・教員は教員免許とESL教育の資格（TESOL）を保有
・バイリンガル教職員の配置
・学習面だけでなく，精神面へのきめ細かいサポート体制



(2) IECの見学を通して

Chatswood（チャッツウッド）IECを訪問し，校長先生と日本人スタッフの方にIECの概要をお聞きした。まず校長室に入ると目に飛び込んできたのは，壁一面のクラス分けされた生徒の顔写真だった。校長先生は生徒の顔と名前を全員覚えていて一人ひとりに目を配っていることが分かった。さらにその写真は色紙の台紙に貼られており，その台紙の色から留学生や入学年度，生徒１人ひとりの学習進度が一目で分かるようになっていた。続いてインタビューの様子を紹介する。

Q．Chatswood IECの特色は何ですか。

知的障がい，情緒障がいの児童生徒に専門のクラスがあるのと同様に，言語の壁によって生じる障がいを乗り超えるサポートする特別支援の学級です。また，英語を学問的に学ぶ語学学校と異なる点は，英語を用いて学問を学んでいます。HSに併設されたIECはHSに入るための準備期間とし，当該児童生徒の学年に準じた学習内容を英語のレベルに分け学ぶことができます。

▼レベル別のクラスとその特徴

	学習者のレベル	身につけさせたい学力
Basic	英語がゼロの状態，アルファベットや基礎的な単語	・生活に必要なための英語（買い物，電車の乗り方など） ・具体的な事象について
Level 1	自分に関すること，日常的な事象（あいさつ，自己紹介，時間など）	
Level 2	自分の考えを表現する，ディスカッション	・英文を読む力，文法の強化 ・英語で考える，詩の勉強
Level 3	現地校の学習内容に必要な基礎的な知識 （歴史，地理，各教科の専門用語など）	・HSに入るための最終準備段階

上記の４つの段階を学期ごとに履修し，現地校への移行となります。それぞれの学期末には４領域（Listening, Speaking, Reading, Writing）すべての力を診断するアセスメント（査定）が行われ，児童生徒の到達状況を吟味し，次レベルへステップアップするか残留となるかを決定します。ただし，結果を出すまでに個々の生徒へのフォローアップは，休み時間の利用や必要な課題追加によって適宜行われます。

Q．教員に必要な資格はありますか。

専門の教科の教員免許，それからESL（English as a Second Language）の資格，そしてHSのカリキュラムを熟知していることです。

Q．言語習得のために，教師と生徒それぞれに必要な要素とは何ですか。

教師にとって，必要な要素は「忍耐」，そして「生徒の分からないという気持ちを理解し共感する心」です。そのためには教師自身が異国の地で様々な体験をしていることが望ましいです。また，学問面のサポートはもちろん，精神面のサポートも大切にしています。例えば，日本人，中国人，韓国人，ベトナム人，タイ人のスタッフが学校に常駐し，主にBasicのクラスの生徒の個別支援や相談に乗ることもあります。生徒のモチベーションは様々で，留学生であれば，単位取得が条件の場合，モチベーションは比較的高いです。生徒それぞれ興味をもつ対象が異なるので，興味を引き付けるために教師が様々な面からアプローチすることが大切だと思います。

５．まとめ

外国人生徒に関わる教育について，オーストラリから学ぶことは実に多かった。国の政策を受け，州や地方団体が迅速に，的確に機能しており，学校が教育機関として使命を全うしていた。IECという教育機関１つをとっても，学習の到達目標が明確であり，児童生徒をHSに移行させるという役割を果たしていることがよく分かった。外国人児童生徒の受け入れに関しては，平等や統合を目指すことも大切だが，ニーズに合った支援を特定期間設けることの大切さを学んだ。私自身はシドニー日本人学校への在籍中，海外生活への適応の難しさを自ら体験し，改めて言語習得の難しさや重要性，秘める可能性，課題などを考えるようになった。大切なことは言語の習得と

は個人の人格形成に大きく関わるという事だ。すなわち人格形成に携わる教育の大切さを感じ，今後の職務に励んでいきたいと改めて思う。